

資料

令和6年度「コミュニティ・スクールと
地域学校協働活動の一体的推進」に係る
文部科学大臣表彰

基本情報

学校

徳島県立板野支援学校

学校運営協議会

徳島県立板野支援学校
学校運営協議会

令和3年4月26日 設置

委員構成

大学教員
社会福祉法人役員
県相談支援専門員
医療関係
地域住民・人権擁護委員
保護者・PTA関係者
校長
など 8名（令和6年度）

会議回数

年間平均3回程度

地域学校協働活動推進員等数
（ ）は内、学校運営協議会委員数

地域学校協働活動推進員 0名（0名）

地域コーディネーター 4名（3名）

地域学校協働本部

徳島県立板野支援学校
地域学校協働本部

背景・取組概要

- ◆ **学校教育目標** 児童生徒一人一人の人格を尊重し、教育的ニーズに応じた指導をおして豊かな生活を支援するとともに、積極的に社会に関わり、自己実現をめざす人間を育成する。
- ◆ **学習指導要領**では、特別支援学校においても「社会に開かれた教育課程」を実現することで、地域や保護者とさらに連携を深め地域とともに児童生徒を育成することが求められている。そこで、学校運営協議会を設置して、地域や関係機関との双方向の情報共有を進めて児童生徒の教育活動を地域に広げ、地域での役割を積極的に担うように取組を広げていく必要があった。
→これからの特別支援学校の在り方として、「地域に教育課程を開き、児童生徒が地域の資源を生かしたり、地域のよさを発揮したりする役割を担うことができる特別支援学校」を目指していく。

工夫・ポイント・特徴的な取組

◆ 学校運営協議会

板野支援学校では、令和3年度の学校運営協議会設置当初より、①安全・安心な学校づくり、②児童生徒に応じた教育活動、③保護者や関係機関等と連携した教育の推進等、学校運営協議会委員から、地域資源の活用を中心に、「学校重点目標」に沿った様々な取組案や連携先等の紹介・提言を受け、学校運営に努めてきた。
令和4年度の学校運営協議会で、学校近隣の畑で、地域の特産であるが、「規格外」として処分されている状況のにんじん活用が話題となった。委員より「規格外」にんじんを、無償提供いただけた地域の農園や、にんじんをパウダー化できる設備がある他の福祉事業所の紹介があった。

◆ 地域学校協働活動

「廃棄にんじんを救おう チャレンジ！」の名称で、令和5年度より「規格外にんじん」再生の活動を始めた。さらに、他の福祉事業所よりパティシエを派遣いただき、生徒と共に「パウダー化した「規格外にんじん」のレシピを開発して、校内のカフェで、にんじんスイーツの試作品を紹介した。

令和5年12月には、近隣の道の駅「いたの」を会場として、にんじんパウダーを用いて調理したスーパースタ130食、にんじんクッキー50個を提供するイベントを開催できた。イベント当日は、生徒が一人一台端末で制作したポスターを掲示したり、これまで「規格外にんじん」の再生に取り組んできた生徒の様子を、県のキッチンカー「でり・ばりキッチン阿波ふんど号」のモニターで紹介したりすることでも、地域住民をはじめとする多くの方に特別支援学校の理解・啓発を進める機会ともなった。

令和6年度には、「規格外にんじんを救おうプロジェクト！～Let's REBORN 板野支援学校～」と取組を改称し、中学部生徒も活動に参加して、学校全体の取組として進めているところである。

成果・効果

- ◆ 学校所在地である板野町の特産であるが、処分されてきた「規格外にんじん」の活用方策が、学校運営協議会が発端となり、また、生徒の主体的な活動を通して、「規格外にんじん」の収穫・調理・加工、さらに道の駅「いたの」での提供へと、学校と地域がこれまで以上に協働するようになった。
- ◆ 地域住民を含む委員のネットワークを生かして、学校の取組に協力いただけた農園や福祉事業所、また道の駅等を紹介いただき、生徒が役割を担いながら地域特産物のよさを改めて学ぶ機会となった。



基本情報

学校

三好市立池田中学校

学校運営協議会

池田中学校学校運営協議会

令和3年4月1日 設置

委員構成

地域コーディネーター
保護者・PTA関係者
公民館関係者
地域団体（青年会議所）
地域住民（元教員など）
小学校関係者
教職員

11名

会議回数

年間平均3回程度

地域学校協働活動推進員等数
()は内、学校運営協議会委員数

地域学校協働活動推進員 3名 (3名)

地域コーディネーター 0名 (0名)

地域学校協働本部

池田中学校サポーターズクラブ

背景・取組概要

本校がある三好市は、徳島県西部に位置し、過疎や少子高齢化により、人口減少が著しい地域である。そのような地域において持続可能な地域づくりを考えると、主体的に行動できる生徒の育成を目指した取組が必要であると考えた。

『ジオパークとSDGsによる人と環境にやさしい学校』を目指す

工夫・ポイント・特徴的な取組

◆学校運営協議会

年に3回開催しており、そのうち1回は授業を参観し、生徒の様子について意見交換をする。直近のテーマは、○ポジティブな行動支援の取組、○学校支援活動、○地域と連携した取組などである。小学校関係者が委員に加わったため、小中学校の連携についても今まで以上に検討していくこととなった。

◆地域学校協働活動

三好市が推進しているジオパーク構想と連携した、郷土学習や防災学習を推進し、行政や防災士会など、地域と連携・協働した取組を進めている。フィールドワークを含めたジオパーク学習の学びから、毎月25日を「池田城の日」と定め、学校周辺の史跡の清掃活動を生徒と教職員が行っている。

◆コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的実施

地域学校協働本部のコーディネーター（地域学校協働活動推進員）が学校運営協議会委員となっており、学校のニーズに応じた支援活動につながるよう、ボランティアに声をかけをしコーディネートしている。コーディネーターの中には、公民館関係者もあり、公民館の講座参加者にも学校のニーズを説明し、支援活動の拡充につなげている。



成果・効果

- ◆三好市が推進するジオパーク構想と学校の郷土学習のねらいがマッチし、学校と地域の連携・協働により地域を大切にしている態度や誇りに思う態度が養われており、持続可能な地域づくりについて、主体的に考え、行動しようとする力がついてきている。
- ＜生徒の感想＞
知らなかった昔のこと等を知ることができてよかった。いろいろなイベントに積極的に参加して、さらに三好市の伝統を知り、その伝統を次の世代に伝え、三好市に少しでも興味をもってもらえるようにしていきたい。